

## 私の東京と古社名刹

大 熊 晋 一

私は昭和九年四月生まれの今年七十五歳。生まれも、育ちに仕事も川口だった。仕事は地域の総合経済団体（川口商工会議所）だったから県内はもとより国内外に出歩くことも少なくなかった。そんな私が今の岩槻に越して来たのは県・市が都市計画し、造成分譲した住宅地を

購入し、家建てた昭和四十七年十二月のこと。それで私や私の家族の岩槻に今は、今年三十七年目を迎えるが。三十八歳でここ岩槻に家を建てた私としては、川口にいた期間の方が、まだもう一年永いことになる。この間、父母を亡くしているが墓地は川口にあるので本籍はそのままにしてある。父は青少年期の数年を日本橋で、時期はその父より少々ずれるものの長野市出身の母は、その隣の京橋で過ごした後、実家の縁者がいたとかで川口へ

来た。そんな父母のせいかどうか、幼少時の私はよく東京へ連れ歩かれた。それで戦中・戦後の記憶の若干を整理してみたが、これは川口にいた頃の話になる。

この四月、先ず羽田空港へ行った。理由は、母と二人で行った想い出があった。確か国民学校の一年か二年生（昭和十六・十七年）のとき、穴守稲荷神社に来て参拝した後。海べりの岩場にある神社の側で、海風に吹かれ、波の音を聴き、おにぎりを食べながら海の向こうに見える飛行場（当時、軍の管理下にあり入場を制限）を望見。そして大森で買って帰った生海苔の母の煮付けが潮の香りがあり、美味しかった。そんな記憶のあったところに昭和五十年代の始め。海外出張をする機会があり、たまたま見た広い空港駐車場に不調和な大きな朱塗りの鳥居が建

つているのを見た。そこで不思議に思った私は側に行き  
掲示板の説明を読んだところ、かつてこの場所に穴守稲  
荷神社があつたこと。戦後進駐軍により強制的に移坐さ  
れたこと。移坐後は何かと事故が起きるので、かつての  
住民からの要望はあり、ここに神社のあつたことの証し  
として大鳥居が建てられたこと等を知った。そんな次第  
で私としてはそれを確かめたくて先ず羽田となつた。浜  
松町駅からはモノレールで、空港第一ターミナルで下車。  
総合案内所で用件を話すと直ぐ駐車場係へ回してくれ  
た。電話に出たのは古参の方らしくよく知っていて「空  
港駐車場にあつた朱塗りの大鳥居や神社の現在地・順  
路、また大鳥居を移したのは事故の問題もあつたが主に  
空港会社の事情によるものである」こと等を教えてくれ  
た。第一ターミナルに棟続きの京浜急行は「①天空橋・  
②穴守稲荷神社・③大鳥居」と続く、その最初の天空橋  
で下車。目的の朱塗りの大鳥居は、海に注ぐ海老取川の  
川辺・弁天橋のたもとにあつた。正面・大鳥居の右手の  
ポールには日章旗が高々とひるがえり、その右横を流れ  
る海老取川の向こう側の陸地には、大きな羽田空港の施  
設が左右に伸びている。ようやく着いたな、そう思う一  
方で七十年近い時の流れを想いつつ拝礼、感慨を深くし  
た。大鳥居には「大鳥居の楽園」と大書した横看板が掲

げられ、その直ぐ下にある石造方形の標柱にはめ込まれ  
た金属銘板に書かれた趣意書冒頭には「忘れません羽田  
昭和二一・九・二一」とある。これは羽田空港が進駐軍  
により接収された日のことで、同日・穴守稲荷神社をは  
じめ周辺の三町会（鈴木町・穴守町・江戸見町）・住宅一二  
〇〇戸・住民約三〇〇〇人は当該警察署より強制退去の  
命令を口頭で伝達されたという。また、事情は違うが大  
鳥居は①昭和五十三年に設置、②同五十九年に移し、③  
平成十一年現在地に設けるとあつた。穴守稲荷神社  
は、駅から数分のところにあつた。同社は同社社伝によ  
れば、近隣の堤防がたびたび決壊し、農作物の被害を受  
けることを憂えた村の有力者が文化元（一八〇四）年頃、  
五穀豊饒を願つて衣食住を司る豊受姫命を御祭神として  
祀つたのが始まりとされる。そのお社の一の鳥居と二の  
鳥居との間に一見鳥居風の鋳物製街路灯がある。些か気  
になつたので、つぶさに観ていくと下部の寄進者芳名簿  
に川口穴守青年会とあり、二十名の氏名が刻まれていて、  
よく観れば知り合いの鋳物業者が四人いた。その上、拝  
礼を済ませた本殿の両脇には天水鉢が一対置かれていて、  
製作者として川口市・山崎甚五兵衛とある。私としては  
面識はないものの旧知の名であり、川口としては知られ  
た名工の一方。その後、社務所におられた権欄宜の菅原

さんと話をしていたら五月には先の川口穴守青年会の人達が大勢でお参りに見えますよ、という。その菅原さんには、まだできたばかりの真新しい立派な同社社史をいただいた。

### 巣鴨のとげぬき地蔵と早稲田の穴八幡宮

川口からは近くて便利なのが巣鴨のとげぬき地蔵（曹洞宗・万頂山高岩山）。電車は王子で乗り換え、都電荒川線で行くと近くて早い。駅からも近い上、境内はそう広くもないからいつ行っても人出でにぎやか。当の水かけ地蔵はこれまた行列が続き、いつ果てるとも知れない。それだけ広く人々の信仰を集めている。だからこの寺にはえもいわれぬ親しみがある。その点、江戸期・仏教系民俗信仰は①地蔵、②稲荷、③不動との順位で人気度抜群といわれていただけのことは今も保持していることになる。ただ、私としては随分とお供をして来ただけのこととで、この歳になっても信仰とはまだまだ縁遠い。でも、浅草の金龍山浅草寺と同じように幾つになっても、また来てみたいところの一つではある。

早稲田の穴八幡宮は、今度で二度目。直ぐ下の妹が十七年七月生まれの頃だったからその秋のことかも知れない。ここへは王子から巣鴨へと同じように都電荒川線で

行き、終点の早稲田で降りた。降りる際、運転士さんに聞いた、昔の終点はもつと先だったのではありませんか、「そうです、飯田橋まで行っていました」、と。これで分かった。矢張り靖国神社へはこの都電に乗り、（当時は地下鉄がなかったので、秋葉原で乗り換えて来るよりは王子で乗り換え、飯田橋から歩いた方が速かった？）飯田橋からは歩いて行つたのだ。六十数年も前にきたことのある穴守神宮へは直ぐ分かった。しかし、見てびっくり。私のイメージとはだいぶ違って大きな社、しかも改築工事中の近代建築の社で、社務所もその内部の左側にある。神社の入り口には案内標識とともに「虫封じの……」と、ある。近代的なお社とこの虫封じ……と、どう一致するのだろうか、とすっかり忘れていたものが一瞬胸中をよぎった。かつて、ここであったことは幼い妹の病氣平癒のためのお百度参り。小高い山の頂きにあるこのお社へは二十四段（工事中）の石段を上る。まだ幼い妹を背負った母は僅かな距離ではあったが、そのお社の前を百回も行き来し、そのつど備え付けの用具で数を数えた。そのとき何の病氣だったかは知らない。しかし、その理由は先の標示板で氷解したが、年月を経た今そんな母の一面を見直した。

## 明治神宮と靖国神社

アルバムを見ると父は町会の役員をはじめ大政翼賛会の青壮年団員として活動していたらしいことが分かる。母は母で同じ町会の婦人会々員として宮城の清掃奉仕隊の一員として参加していた記念の集合写真がある。私はと云えば二年生のとき、貯めたわずかなお年玉や何かを献金したところ、その秋陸軍大臣東条英機名の感謝状をいただく。そんなわが家では自然、明治神宮や靖国神社へも連れて行かれた。特に明治神宮では、修身の教科書にもあった「深い木立の中の参道をサク、サクッと玉砂利を踏んで、やがて着いた神々しい拝殿に向かって、二拝・二拍手・一拝して……」とあるような気分・経験をしたことが想い浮かぶ。内苑の花園、外苑の絵画館等はそのときに覚える。

靖国神社への経路については先に述べた。永い間喉につかえていたものが氷解してスツキリする。その靖国神社では秋の例大祭の折、戦況を描いた立体的なパノラマ展があった。昭和十八・十九年のいずれか、参道左手に拝殿に向かいずーっと展示してあった。厳しい戦況下、国民の士気高揚を図り企画したものだろう。今にして記憶する協力された画家の名に猪熊玄一郎と小磯良平のお二

方がある。二人とも既に亡い。何故か分からぬがお名だけ覚えていて。小磯良平さんの作品については、たまたま数年前再会した。文字通りの再会。赤坂の迎賓館での出会い。宴会場の出入り口両袖に、縦長の作品で若い画家のアトリエとピアノの前の音楽家との若い芸術家の情景。妻と来たここ迎賓館は、公募の抽選にあたったものだが。実は戦後間もない昭和二十四年、中学三年のとき私は母に云われ近くに住む母方の叔父と一緒に来たことがある。当時は国立国会図書館として国民に解放、広く閲覧に供していた。したがってこちらも、再会ということになる。

想えば、まだある。乃木神社に東郷神社。乃木將軍については学習院々長の時代、官舎だった木造二階建の住居と厩舎も観てる。戦後も早や六十余年、東京も変わったがわが国も変わる。その節目節目に生きてきた私は、医者通いをしていたせいでその帰り道一面焼野原の銀座を見い見い、新橋から神田までをよく歩いた。また、私は六十歳になった年の八月十五日から、毎年この日・戦死したもう一人の叔父のため、靖国神社に参拝している。

(埼玉県郷土文化会)